



尊 厳 と 希 望 の 架 橋 に 向 け て

第4回希望学セミナー

岡 野 八 代

2005 年 11 月 11 日

これは 2005 年 11 月 11 日のセミナーの口述記録を要約整理したものであり、

転載や法に反する引用はできません。

第4回希望学セミナー

2005年11月11日

テーマ「尊厳と希望の架橋に向けて」

報告者 岡野八代氏（立命館大学）

報告

0]希望の在処——「希望学を始めます」より

「希望は、各個人にとっての過去と未来とをつなぐ展望を与えます。また希望は、個人と個人との関係を規定します。その希望が、今まさに問題となっているのです」。

「では、仕事や暮らしのなかの希望は、いったいどのように形成され、そして失われるのでしょうか」

*希望学が目ざす三つの「普遍的な」問い

①「社会において個人が形成する希望とはそもそも何なのか」という問いです

←今回考えてみたいこと

②「社会が個人の持つ希望にどのような影響を及ぼすか」

③「個人の形成する希望が社会状況をどのように規定するのか」

1] 政治思想の観点から（とくに、ハンナ・アーレント研究を通じて）

「希望」という言葉によって喚起されること

= 〈わたし〉の中に希望があるのか否か、この社会の中に希望があるのか否か、という問いの設定ではなく、何処にわたしたちは「希望」の光を見いだすのか、という問いの設定。

少なくともわたしが、小さな希望をこの世界において見いだすのは、さまざまな困難を強いられてきた人びとの生き様に、アーレントの言葉を援用すれば『暗い時代』に生きる人びとの中に、彼女たち・かれらの「尊厳」の痕跡¹を感じるとき。

アーレントからわたしが学んだこと

ハンナ・アーレント(1906-1975) 全体主義の経験から、現代における「世界喪失」「故

¹ 尊厳の「痕跡」という具合に、〈もはやない〉、という含意をここで込めている理由については、2) で詳しく論じる。

郷喪失」「想起の不可能性＝忘却の危険」について、思考し続けた思想家²。

「希望学」との関連でヒントになるであろうアーレントの思想

- 1) アーレントの問題関心：「世界の終わり」から、いかに「始まり」を思考しうるのか？
- 2) 人間存在にとっての「想起の力」「記憶」の大切さ（二〇世紀にユダヤ人女性として生き残った者たちの経験から）

＝わたしたちの「未来」の構想は、過去をいかに想起しうるかにかかっている。彼女にとって「政治学」とは、過去における一つひとつの「始まり」を出来事として記憶し、想起させる学問。

- 3) アーレントの信念：「世界」の存続の可能性を一人ひとりの新しい生の挿入、世界における「一つの始まり」に賭ける（あまりに、かすかな「希望」？）

全体主義の経験を語るさいにアーレントが好んで引用する、アウグスティヌスの言葉

「始まりが存在せんがために人間は創られた。この始まり以前には何者も存在しなかった」
[アウグスティヌス『神の国』]。

1) アーレントの問題関心：全体主義がもたらした世界の「終わり」と「始まり」

「[全体主義というその]「犯罪」が伝統的な道徳の規準で判断することも、われわれの文明の法の枠組みで裁き罰することもできない全体主義の支配が一つの既成事実となったとき、西洋の歴史の連続性は断たれた。伝統の断絶はいまや確定的な事実である。この断絶は誰かが意図した選択の結果でもなければ、今後われわれの裁量でどうにかなるものではない」[『過去と未来の間』]。

アーレントにとって伝統とは、世界につねに異人として生まれてくる新しい世代が、世界と自分自身を経験し理解するさいの拠り所であると同時に、過去－現在－未来という人間特有の時間概念をわたしたちに与えてくれる。なぜなら、伝統は、過去の財産を選択し、名づけ、伝え、保存することで、そうした財産を現在へ伝え、また未来へと手渡していく。過去から受け継いできた遺産のみが未来を照らすことができるため、人間にとって過去がなければ未来も存在しない

⇒伝統への回帰を唱えたのではない。彼女の問題関心は、では、そうした伝統なき現代において、いかにわたしたちは、過去の中に未来を照らす出来事を見いだせるのか、である。もはや現代において、共有しうる確かな「伝統」はない。その意味で、現代における「現在」とは、過去と未来との「裂け目」でしかない。伝統（宗教・権威）という導きの糸な

² アーレントは、多くの政治学研究者によって自由論や行為論、公共性の再興といったテーマを中心に語られているが、わたしにとってアーレントは、むしろ忘却されがちなひとびとの苦悩や小さな出来事に関心を寄せた思想家である。

き世界で、いかにわたしたちは、忘却の危機から「救済」されるか？

現代の危機

「その[見捨てられてあることの]危険は、いたるところで終わりにさしかかっているように見えるわれわれのこの世界を、その終わりから新しい始まりが甦るひまもないうちに荒廃させようとしていることである。しかもこの始まりというものは、それ自体すべての終わりに含まれているのであり、いや、終わりというものが本来われわれに約束してくれているものだ。——「始まりが存在せんがために人間は創られた」とアウグスティヌスは言った。この始まりは常に、そしていたるところにあり、準備されている。その継続性は中断されえない。なぜならそれは一人ひとりの人間の誕生ということによって保障されているのだから」[『全体主義の起源』]。

全体主義以後の世界についての、アーレントの危機感＝「見捨てられてあること」の偏在性→この危機に抗うために、アーレントはその後「公共性」(つまり、自らの行為や語らいが、複数の他者を「証人」としながら、見られ・聞かれ・記憶される場)の再興へと議論を進めるのだが、ここでは公共性の議論へと進むのではなく、アーレントの物語論に注目してみたい。

2) 人間存在にとっての「想起の力」「記憶」の大切さ

「見捨てられてあること」＝すべての「終わり」に「始まり」が告げられているはずなのに、「始まり」が甦らない？何を言っているのか？＝アーレントの物語論³

アーレントの物語論

アーレントによれば、ひとの生や出来事の意味や価値が露わになるのは、そのひとの人生が終わり、あるいは出来事が終わり、物語られるときである。こうした物語論を背景に、「終

³ アーレントの物語論は、『暗い時代の人々』における「アイザック・ディネーセン」論で、最も詳しく展開されている。

アーレントによればまず、「世界は物語に、すなわち事件や出来事や奇妙な突発事に満ちており、それはただ語られることを待っているからである」。そしてそれが通常語られないままではいる理由は、「アイザック・ディネーセンによれば、想像力の欠如による——ともかくも起こったことを想像し、想像力の中で反復することができさえすれば、物語をみることになるろうし、それを繰り返す語る忍耐力さえ持ち合わせていれば、それを上手に語るができるようになるであろうから」。アーレントは、ディネーセンの言葉「物語に忠実であれ」を、つぎのように解釈する。その言葉は、「人生が与えるものを受け入れよ、それを想起し熟考することによって、すなわちそれを想像力のなかで反復することによって、たとえ何であれそれが価値あるものであることを自分自身に示せ、ということ」を意味しているというのだ。アーレントの問題関心から、[『暗い時代の人々』]。

わり」が「始まり」を告げているとアーレントが言うとき、「終焉」によって初めて事物が物語として語られるとき、その事物が告げている意味・価値、つまりはそれが、世界における新しい一つの「始まり」であったことが告げられる、ということを意味している。

「すでに開始された行為の意味は、行動自体が結末に近く、叙述しやすい一つの物語になってはじめて明らかになります」[『暗い時代の人々』]。

しかしながら、多くのひとは「見捨てられ」＝忘却される危機にさらされている。

「われわれの同胞は、自分の行為について釈明もしなければ、世界に対する告発や非難も残していかない。それまで世界は、絶望した人間に何かを語らせ、まさにその最期の日まで快活にふるまうよう強いてきたものだったのだが。彼らが残した手紙は、型どおりの意味のない文章である」[『パーリアとしてのユダヤ人』]。

＝「残されていない」「語られていない」ので過去の想起には、「想像力」を要する

Ex.) アーレントの思想家としての姿勢をよく伝える若き日の詩

「無題」

過去のだんだ池のなかから 立ち現れてきた
数多くの思い出

霧の形象は 囚われたわたしの 切望の弧をえがき
消え去っていく、いざないながら、目ざすあたりで

死者たちよ、何を望むのか？あなたたちの国には 故郷や聖地はないのか？
ついに深き平和があるのではないのか？
水と大地 炎と空気が あなたたちにゆだねられている あたかも
神があなたたちに力をふるい そして呼んでいるように

流れのない水、沼、湿地、池のなかから
ひとつに 呼び集められ
ほのかにちらちらと光りながら 生者の国々の霧で覆われているあなたたち
暗い来歴を嘲笑しながら

わたしたちもまた戯れよう つかみ、笑い、ひつとらえよう
過ぎ去った時の夢を
わたしたちもまたうんざりしているのだ 街路に、街に、すばやい
孤独の変転に

[cf. 矢野久美子『ハンナ・アーレント、あるいは政治的思考の場所』、三九頁]

3) アーレントの信念：わたしたち一人ひとは、世界でたった一つの「始まり」である
＝だからそこに、ひとの尊厳（自由の根拠）が示されている

「最も暗い時代においてさえ、人は何かしら光明を期待する権利を持つこと、こうした光明は理論や概念からというよりはむしろ少数の人々がともす不確かであらちとゆれる、多くは弱い光から発すること、またこうした人々はその生活と仕事のなかで、ほとんどあらゆる環境のもとで光をともし、その光は地上でかれらに与えられたわずかな時間を超えて輝くであろうということ」[『暗い時代の人々』]。

アーレントがここでいう「光明」とは、わたしにとって、苦難を強いられてきた人々の証言を聞くときに感じる、彼女たちの「尊厳」の痕跡

「見捨てられてきた人々」に出会う時に感じる、感動の在処＝彼女たちの顔に残り続ける「尊厳」の痕跡

2] 希望の在処＝「尊厳」の痕跡＝政治学の実践性

1) わたしにとっての政治学（理論）とは、多くの人の「尊厳」を踏みにじる政治の暴力性を綴っていくこと、記憶すること

＝ex.) ジュディス・シュクラーによる「記憶の党派 a party of memory」と「希望の党派 a party of hope」⁴という分類[ジュディス・シュクラー「恐怖のリベラリズム」]。

「記憶の党派」＝宗教戦争等がもたらした過去の残酷な行為の「記憶」をつねに呼び起こす能力に依拠する「恐怖のリベラリズム」を意味している。

＝最悪を避けること、不正義を避けることを主旨とする、リベラリズム

「公的な残酷さはときどきの個人的な嗜好ではない。この残酷さを可能にしているのは、さまざまな違いをもった公権力である。いかなる統治・政府であっても、自らの本質的な機能を果たすためには強制の体系に依拠せずにはいられないわけだが、公的な残酷さはかならずといってよいほど、この強制の体系のなかに埋め込まれている。最小レベルの恐怖はいかなる法体系にもふくまれているのである。だが、恐怖のリベラリズムは、公的な強制的統治・政府がいつか終焉するだろうなどと夢見るものではない。恐怖のリベラリズム

⁴ 「希望の党派」に属するリベラリズムにとって、政治とは、法的に保障された目的を追求さいの公正な規則や判断に関わること、あるいは、個人の潜在能力を最大限に活用しうるために個人が自由に活動しうる領域をできるだけ確保しようとする、ことである。「希望の党派」にとって、市民が一定のルールの下で、未来へ投影された自らの善・目的を実現することを保障することが、政治である。

ムが除去しようと望んでいるのは、恣意的で、予期せざる、不必要な、認可なしの強制力の行使によって生み出される恐怖である」[シュクラー「恐怖のリベラリズム」]。

数多くの、恐怖の経験＝そして、それが忘却されようとしている現在、政治学の実践性が試されている

↓政治学が人間の悲惨さにこだわる理由[ex. 加藤節『政治学を問い直す』]

「記憶の党派」＝過去の想起（しかも、陰惨な政治暴力のみを専ら想起する）に、「希望」があるのか？

わたしにとっては、五〇年間、自国で、そして日本に対しても沈黙を強いられてきた従軍〈慰安婦〉にされた女性たちとの出会いの衝撃が大きな契機

2) 過去の証言を聞くこと＝過去の書き換え＝未来の到来

未来とは何か

未来＝未だないこと not yet to be （過去にも、現在にも到来していないもの＝過去・現在において否定されてしまったもの）

デリダにおける「肯定的脱構築」の知見を援用して

未来＝ a future yet to come, deferred future ＝過去を脱構築するときのみ、未来が到来する。未来を創出するためには、過去を創出し直す必要がある。未来が過去を創造するといってもよい。

↓何を言っているのか？

従軍〈慰安婦〉にされてしまった女性たちは、ようやく現在になって証言をし始めた。彼女たちの証言以前には、彼女たちはわたしたちの過去の中には存在していなかったのであり、彼女たちが受けた被害についても存在していなかった。その意味で、彼女たちの生は、過去（そして、悲しいことに多くの日本人の現在にとって）において未だ到来していなかった、という意味で、未来であり続けた。東アジア冷戦構造の中での権力構造において彼女たちの存在は、「遅らされてきた未来」であったともいえる。

＝彼女たちが到来した現在からみれば、過去の彼女たちは、到来す「べき」未来としてつねに過去においても存在し続けていた。彼女たちの過去における存在は、当時の「現在」が現前するために否定され続けていた。

以上のことから分かるのは、未来とは、現在においても過去においてもけっして現前してこなかったものであると同時に、他方で「現在」の中に（否定形であるが）痕跡として残存している。彼女たち＝未来が到来するためには、わたしたちは、彼女たちを否定し続け

てきた過去を創出し直さないといけない。

証言を聞くことの政治的重要性について

Witnessing（証人となること）の意味

Observing

Testifying＝自分が目撃したものに対する証言と、見ていないもの、見ることのできないものに対する証言

Listening to the testimony of others＝証人が語り得ないものをも聞くこと

2004年12月4日全国同時証言集会、沖縄国際大学でのイ・オクソンさんの忘れることができない言葉。「謝罪も補償もない。ただ、自分を徴用していたときの名簿を探し、自分の〈名〉を提示してほしい」。

↓何が否定されていたのか？

彼女の言葉が示すもの＝従軍〈慰安婦〉にされた女性たちが『東京女性国際戦犯法廷』（二〇〇〇年一二月）で求めたこと＝「尊厳」の回復

過去五〇年以上にもわたって彼女たちが否定されてきたと感じている「尊厳」（＝どのような状況においてさえ、わたしたち一人ひとりが「始まり」であり、そこには生きる意味・価値が存在するということ）を取り戻すために立ち上がる彼女たちの中に現存する「尊厳」（＝過去を書き直す力をもった、新しい始まり）に対して、わたしは最大限の敬意を払っている。

そして、否定されてきた彼女たちの当時の「尊厳」の痕跡を、わたしは彼女たちの証言に見いだす＝陰残な過去において否定されてきたものを、現在において救い出すことで、未来を拓く可能性があるのではないか？

陰残な過去を生き延びてきた彼女たちこそ、わたしにとっての「希望」である。